

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32622

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K12093

研究課題名（和文）看護師の倫理的行動を促進する教育・支援プログラム開発のアクションリサーチ

研究課題名（英文）Action research on the development of educational and support programs to promote ethical behavior among nurses.

研究代表者

福宮 智子（Fukumiya, Tomoko）

昭和大学・保健医療学部・講師

研究者番号：00644593

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、臨床における倫理的問題に関する看護師の「行動」に着目した教育・支援プログラムの開発を目指した。臨床看護職の倫理的行動や道徳的感受性の実態、基礎教育終了直後の新人看護師の臨床倫理に関する学習経験の実態を明らかにするとともに、対象者別の教育・支援プログラムを開発し評価を行った。OJTと連動させた効果的な研修のあり方や倫理的な行動力を高めるための具体的なアプローチのポイントなどが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

臨床における倫理的問題の解決が促進され患者アウトカムを高めていくには、日常的な倫理的問題に気づき、それを抱え込まず、諦めず、患者を主語にした合意形成を目指す倫理的行動が基軸となる。倫理的感受性を高める知見は蓄積されてきているが、倫理的行動力を高めるための知見はほとんど見当たらない。本研究では実際に倫理的な行動を起こすことにつながる教育や実践支援に関する知見を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop an educational and support program focusing on nurses' "behavior" regarding ethical issues in clinical practice. The study clarified the actual state of ethical behavior and moral sensitivity of clinical nurses and the actual state of learning experiences regarding clinical ethics among new nurses. Then, subject-specific education and support programs were developed and evaluated. As a result, we identified effective educational programs linked to on-the-job training and specific approaches to enhance ethical behavior.

研究分野：臨床倫理

キーワード：臨床倫理 倫理的行動 倫理教育 看護倫理

1. 研究開始当初の背景

社会は、医療専門職者に高い倫理的責任を期待しており、それに応えうる実践者の育成が今まさに求められている。特に看護師には、患者の QOL を最善に高めるべくそのニーズと持てる力をくみ取ったうえで、状況に応じたリソースの活用を含めたチーム医療の要としての調整的役割が期待されている。倫理的な問題解決が促進されるための要素は、組織的観点を含め複数指摘されている。だが、現場の治療チームのメンバーが、日常の倫理的な課題・問題に「気づき」、抱え込まず、諦めず、適切なメンバーとともに患者を主語にした合意形成を目指すような「行動」が基軸となることは間違いない。

「気づき」、つまり倫理的な感受性については、先行研究において知見が蓄積されてきており、尺度開発も進展している。しかしながら、看護師の経験した倫理的問題は未解決の割合が高い実態や、道徳的感受性と倫理的問題の解決割合の間に相関が認められなかったという報告がある。また看護師は、たとえ問題に気づいても、集団の中での均質性を重んじて同僚や医師に「言えない」傾向や、「深く考えないようにした」などの回避的な対処をとる傾向も複数報告されている。この実情は看過してはならない。元来備わっていたはずの倫理的な感受性の抑圧や、バーンアウト・離職にもつながるものであり、実に深刻である。つまり、倫理的な問題解決を促進するためには「行動」を支える教育と実践支援が不可欠である。現場の看護師たちが倫理的問題に気づき、専門職として行動を起こすべきと認識し、いかなる障壁に遭遇しても撤退することなく、解決につながる行動を起こす、この倫理的な行動力を高めていかなければならない。だが、現場で実際にそのような行動を起こせるか否かにまで踏み込んで教育・支援を検証した研究は見当たらない。

以上のことから、看護師が実際に「行動」を起こす力にまで踏み込んだ倫理的能力を促進する実践的な教育と、現場における支援とを連動させたプログラムの開発が喫緊の課題と認識するに至った。なお本研究は、今後、多職種チームとしての倫理実践を促進する内容への発展を見据えたものである。

2. 研究の目的

本研究は看護師が様々な障壁を乗り越え実際に倫理的行動を起こす力を高めることをアウトカムとする教育・支援プログラムの開発を目指し、以下を計画した。

- (1) 看護師の倫理的能力の実態と課題を明らかにする。
- (2) 倫理的行動力の評価法を開発する。
- (3) 対象者別の教育・支援プログラムを開発する。

3. 研究の方法

本研究では、まず文献検討と研究者らのこれまでの調査結果をふまえ、教育・支援プログラムと倫理的行動力を評価する質問紙の原案を作成し、看護倫理研究の専門家と検討した。そのうえで、基礎教育終了直後の看護師および臨床看護師の倫理的能力の実態と課題を明らかにするため無記名自記式質問紙調査を行った。この解析結果を活用するとともに、専門看護師として現場に入り込みながら行うアクションリサーチの手法を用いて教育・支援プログラムを開発し評価した。収集したデータは、統計解析ソフト SPSS を用いて解析し有意水準は 5%未満とした。なお本研究は昭和大学の倫理審査を経て実施した。

4. 研究成果

(1) 臨床看護職の倫理的行動力と道徳的感受性の実態

6 施設の総合病院に勤務する看護師を対象に無記名質問紙調査を行った。調査項目は、道徳的感受性を測定する J-MSQ2017（前田ら 2017 第 20 回 EAFONS 発表、以下 感受性）、研究者らが作成した倫理的行動力に関する 39 項目（以下 倫理的行動力）、過去 1 年間の倫理カンファレンスの経験、職位（新人、スタッフ、係長、師長）、臨床経験年数などの属性とした。感受性と倫理的行動力の項目は 1～6 点に得点化した（高い方が望ましい）。

分析対象は 2379 名であった（回収率 74.2%）。まず倫理的行動力に関する項目の妥当性の確認と構成概念を抽出するため因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、信頼性の確認には Cronbach の α 係数を用いた。因子分析の結果 5 因子が抽出され、因子 I 「意向尊重と権利擁護」、因子 II 「情報把握と状況判断」、因子 III 「多角的検討と最善策立案」、因子 IV 「カンファレンスへの主体的参画」、因子 V 「最善策を実現する調整的行動」と暫定的に命名した。 α 係数の範囲は 0.92～0.94 であった。

倫理的行動力について下位概念間の差を職位別に検討したところ、新人（基礎教育終了直後）以外は共通して因子 II < V < III < IV < I のような得点状況であり、新人は IV < III の点のみ異なっていた。5 つの下位概念のなかで、職位に関わらず因子 II 「情報把握と状況判断」の得点が最も低く、教育・支援の必要性の高さが明らかとなった。職位による差を検討したところ、基本的に職位が上がるほど得点が高かったが、師長と係長との間に統計的に有意な差を認めなかった。

ほか、因子Ⅰ「意向尊重と権利擁護」、Ⅲ「多角的検討と最善策立案」は新人よりもスタッフの方が低い傾向にあった。入職直後の新人と比べ、スタッフは業務に追われる日々のなかで“実際的には行えていない”と認識している傾向が明らかとなった。繁忙度が常に高いと言っても過言ではない現場では、道徳的苦悩(moral distress)が生じやすく、その苦しさが健康的に対処されない場合、結果として倫理的感受性や行動力の低下につながりかねない。倫理的な感受性を育み、維持し、実際に倫理的行動を起こせるようになるためには、現場スタッフにとって無理のない現実的な方法や仕組みの検討も重要と考えられた。

臨床経験年数と倫理的行動力との関連では、5因子全てとの間に有意な正の相関を認めたが $r < .20$ の弱い相関であった。職位をスタッフに限定し、臨床経験年数を①2~3年目、②4~6年目、③7~10年目、④11年目以上に4分類してその差を検討したところ、統計的に有意差を認められたものは因子Ⅰ、Ⅳ、Ⅴのみであり、因子Ⅱ「情報把握と状況判断」、因子Ⅲ「多角的検討と最善策立案」は有意な差を認めなかった。なお、感受性についても、全ての下位概念と臨床経験年数との間に有意な正の相関を認めたが、いずれも $r < .20$ の弱い相関であった。これらのことから、単に臨床経験を積むだけでは、倫理的な感受性も倫理的行動力も育まれていかない可能性が示唆された。

倫理カンファレンスの経験と倫理的行動力との関連を施設別で見たところ2施設で有意差を認めた。施設Aは因子Ⅰと因子Ⅳにおいて、施設Bは因子Ⅳにおいてカンファレンスの経験が3回以上の群が高い得点を示した。この結果から、倫理カンファレンスを複数回経験することで倫理カンファレンスにおける主体性が育まれる可能性と、倫理カンファレンスの質を高めることの重要性が示唆された。

(2) 新人看護師(基礎教育終了直後)の臨床倫理に関する学習経験の実態

4施設の総合病院に勤務する新人看護師を対象に無記名質問紙調査を行った。調査項目は、看護系最終学歴、基礎教育での学習経験(倫理綱領、臨床倫理4分割表、倫理4原則、倫理事例検討)の有無とした。分析対象は389名とした(有効回答率95.8%)。看護系最終学歴は、4年制大学54.2%、専門学校・短大43.2%、その他(助産学専攻、大学院)2.6%であった。

倫理に関する学習経験は、倫理綱領について「なし」16.8%、「あり」83.2%で、後者は専門・短大91.1%、4年制大学78.9%で統計的に有意差を認めた。4分割表については「なし」92.4%、「あり」7.6%で、後者は専門・短大3.6%、4年制大学10.8%で有意差を認めた。倫理4原則については「なし」47.8%、「あり」52.2%で、後者は専門・短大47.9%、4年制56.8%で有意差は認めなかった。

倫理事例検討の経験は、「経験なし」20.6%、「経験あり」79.5%であり、後者のうち実施時期は、「基礎看護関連」27.7%、「領域別実習前」21.6%、「領域別実習前後の両方」9.8%であり、この3つは専門・短大が有意に多かった。「領域別実習後」は20.3%で4年制の方が有意に多く、「実習中」は14.8%で学歴による有意差は認めなかった。

これらの結果から、基礎教育終了直後の新人看護師において、実事例に関連づけた倫理の学習経験の少なさに加え、倫理4原則の学習経験すら「ない」と回答した割合が半数近く存在する実態が明らかとなった。倫理的行動の促進を念頭においた新人看護師への現任教育は、事例検討を複数組み込み、立場に応じた倫理的行動を自分事としてイメージできるように工夫しながらも、基本的知識から理解できるような内容とする必要性が示唆された。

(3) 新人看護師を対象とした倫理に関する教育プログラム

4施設の総合病院に勤務する新人看護師を対象に、全3回(90分~180分/回)で構成した教育プログラムを各施設で実施した(業務内必須研修)。講師は専門看護師が担当し、毎回リフレクションとグループ討議の演習を組み入れた。

第一回(5月)は、「倫理を身近に感じることができる」、「倫理原則の内容を理解できる」を目標とし、倫理綱領や倫理原則などの基本的知識について、臨床で頻回に遭遇する場面を提示しながら説明し倫理的感受性を高める内容とした。さらに自身の臨床で経験した場面の振り返りをグループで討議した。第二回(7月~8月)は、「倫理的行動を考えることができる」を目標とし、復習をかねて倫理的感受性(現場での気づき)についての振り返りを行った後、模擬事例を用いて倫理的問題の整理や分析など倫理的思考のトレーニングを行った。第三回(11月~12月)は、「チーム医療の一員として看護専門職としての自覚をもち倫理的行動を考えることができる」、「倫理的問題を検討するために必要な情報と思考整理の方法がイメージできる」を目標とし、模擬事例2件について4ステップモデル(小西,2014)を用いたグループ討議を行った。

評価項目は、倫理的能力4項目[A倫理を身近に感じる]、[B原則理解]、[C問題整理]、[D分析・整理](1~4点、各回前後計6時点)、演習効果5項目[Eケアへの結びつき]、[Fすっきり感]、[G気づく力の向上]、[H分析力の向上]、[I行動力の向上](1~4点)、研修時間(長い、ちょうどよい、短い)、満足度(4段階、不満~満足)とした。評価項目は看護倫理の専門家によるスーパーバイズを受けて作成した。

分析対象は、3回全てのプログラムに継続参加し有効回答を得た362名(回収率88.7%)とした。倫理的能力A~Dの平均値は全て、毎回の研修前後および第一回研修前と第三回研修後で有

意差に上昇した。倫理的能力の平均値は各回共通でA>B>C>Dの順であり、一方、研修後と次回研修前との比較では毎回有意に下降していた。演習効果E~Iの各平均値(第2回,3回)については、Fが2.8~2.9で最も低く、その他は全て3.2以上を示し、特に[Eケアへの結びつき]と[G気づく力の向上]が高値であった。各回の満足度は、「まあ満足」+「満足」が96.4%、93.7%、92.2%と高値を示した。

本研修は高い満足度が確認できたうえ、新人看護師の倫理的能力を高める可能性が示唆された。ただし臨床での体験も値の上下方向はさておき影響していると考えられる。研修後から次回研修前に値が毎回低下していたことから、研修での学習内容を実践で意図的に活用し、研修効果を維持・向上できるようなOJTによる支援が重要と考える。この観点からは、効果的なOJTを担える人材育成が必須であり、新人に対するOff-JT担当者が、現任教育担当者に対する研修と実践支援も併行して行いながら緊密な連携を促進していくことが望ましいと考えられた。

(4) チームリーダー以上を対象とした教育プログラム

1 施設の看護部において例年実施している任意研修の一環として、チームリーダー以上を対象とした追跡調査つきの教育プログラムを実施した。テーマは「看護倫理：こんな時あなたは どうしますか?」とし、目標は「臨床で「何かおかしいな」「本当にこのままで良いのかな」と思った時に立ち止まり、解決に向けた道筋を見出す方法を理解し実践できる」とした。

研修は90分1回完結型で、①身体抑制、②意思決定支援、③DNARの3種類のテーマで立案した。基本構造は、模擬事例を材料にした日頃の倫理的行動に関する振り返り、テーマに関する倫理のミニ講義、事例についてグループ討議(なすべきこととその根拠を具体化する)、全体共有後に講師のフィードバックを受けて再度グループ討議で深め全体発表後、今後の実践に向けての思いを述べ合う内容とした。また研修担当者が研修終了後に該当部署に一度出向き参加者に声をかけて実践支援の機会を設けた(その後は参加者からのコンサルテーションがあった際に支援した)。これらのプログラムは6分野の専門看護師による合議で立案し、講師は関連分野の専門看護師が担当した。グループ討議には専門看護師のファシリテーターを配置した。

評価項目は、前述した倫理的行動力に関する5因子39項目(以下倫理的行動力,1~6点,高い方が望ましい)、J-MSQ2017(前田ら2017)、倫理的能力6項目[A倫理を身近に感じる]、[B-1原則理解]、[B-2判断行動を4原則で説明]、[C-1必要な情報]、[C-2問題整理]、[Dすべきことの分析・選択](1~4点)とした。データ収集は、研修受講直前に個人識別番号を付した自記式評価用紙を配布し研修開始前に回答を求め、受講後に自由意志に基づき提出してもらった。研修時に説明し約8ヵ月後の2月に追跡調査用紙を配布し任意で提出を求めた。

分析対象は、事前調査と追跡調査の両方で回答が得られた21名とした(回収率55%)。倫理的行動力5因子の6月の中央値は3.4(因子II)~4.1(因子I)の範囲、2月の中央値は3.5(因子III)~4.4(因子I)の範囲にあった。倫理的行動力5因子について有意な差は認められなかった。最も変化が大きかったのは因子II「情報把握と状況判断」で平均値+0.4、中央値+0.3であり、下位項目としては医療者間の情報共有や倫理原則の視点での検討に関する項目において有意な差を認めた。倫理的能力については、[B-2判断行動を4原則で説明]、[C-1必要な情報]、[C-2問題整理]の3項目で有意差を認めた(平均値+0.5~+0.6)。感受性をはじめその他の項目では有意差は認められず、特に基本的な指標である[A倫理を身近に感じる]については中央値4.0で同値であったが、平均値では-0.14と僅かに低下していた。B~Dで追跡調査時に低下を示した項目はなかった。低下した主な理由としては、知的には行動変容をしたい、すべきと理解している一方で、自信のなさや繁忙さから、日頃、倫理的に考えたり行動したりすることを思うように行えていないという複雑な心情が影響している可能性の存在が、その後のアクションリサーチのなかから見えてきた。

今回、任意の院内研修として一般的な長さとする90分のなかで、事例を用いたグループ討議などを実施したものの、8ヵ月後にはその効果がほぼ確認できなかった。研修後、定型として一度の実践支援と研修半年以上後に同じ項目で自己評価をするという刺激では不十分であることが示された。チームリーダー以上という対象を考えると、倫理的行動力の各因子で4点台後半は目指す必要があると思われる。ケアにつながる倫理的な行動力を高めるためには、部署の看護管理者や係長と緊密に連携し、意図的な研修後のOJTや動機付け、専門看護師によるアウトリーチ的な働きかけの強化、できていることを認めたり患者アウトカムとの意味づけを伝え自信を高めるフィードバックなどのより踏み込んだ工夫が必要と考えられた。

(5) 係長を対象とした倫理的行動を促進する教育プログラム

プログラムは全3回の集合研修(約50分/回)と現場での実践で構成した。集合研修は年間を通して行われる係長の役割研修の時間内で実施した。第一回(6月)は、倫理的行動の必要性に焦点をあてた講義のあと、模擬事例に対する係長としての倫理的行動について、まずは個人でワークシートに記載したのち、グループで討議した。その後、自部署に視点を変え倫理的課題を複

数列举したうえで、係長としての具体的な行動目標をワークシートに記載後、グループで検討を行った。第二回（10月）は、行動目標に則った実践についてグループ討議し、ワークシートの追加や修正を行った。必要に応じて倫理的課題の再点検と焦点化も討議した。研修時の様子や研修後に提出されたワークシートを確認し、必要に応じて個別支援も実施した。第三回（1月）は、係長としての倫理的行動の実践内容と結果、考察、今後の課題等をグループ共有のうえ、今後の課題に対するアクションプランを5W1Hでワークシートに記載した。その後、グループごとに要約し全体発表した。各回（第一回開始時、第二回終了直後、第三回終了直後）で無記名自記式質問紙調査を行い、次回研修時に全体の傾向等をフィードバックすることで倫理的行動の促進を図った。調査項目は、前述した倫理的行動力、倫理的能力[A倫理を身近に感じる]、[B原則理解]、[C-1必要な情報]、[C-2問題整理]、[Dすべきことの分析・選択]、[E倫理カンファレンスでの司会]（1～6点）とした。

分析対象者は同意が得られた26名とした。5因子全てにおいて、研修前と第二回後との比較で有意な変化を認めた。研修前と第三回後との比較で有意差を認めたものは、倫理的行動力の因子Ⅲ「多角的検討と最善策立案」、因子Ⅴ「最善策を実現する調整的行動」の2因子にとどまった。倫理的能力の項目においては、[C-1必要な情報]、[E倫理カンファレンスでの司会]の2項目で第二回後に有意な改善を認めたが、研修前と第三回後では有意差を認めた項目はなかった。調査項目全体において平均値や中央値での概観では改善傾向であった。

最終回研修時に提出されたレポートについて質的に分析したところ《今回の取り組みによる気づき》として記述されたものは、〈看護上の倫理的課題に関する気づき〉、〈スタッフの倫理的感受性に関する気づき〉、〈規定や“いつも”に捉われず実現可能な方法を探ることの大切さへの気づき〉、〈倫理カンファレンスの効果に関する気づき〉の4つのカテゴリーに分類された。また、《倫理的行動による変化》として記述されたものには、「面会制限のジレンマに対し、医師を巻き込んだタイムリーなカンファレンスを行い個別性に応じた面会を実現できた。その結果公平性ばかりに捉われず個別性を考えて発言するスタッフが増えた」、「スタッフが意図的に患者や家族の理解度やニーズを把握するようになった」、「スタッフのせん妄ケアに対する感度が増した」、「身体抑制解除の検討が促進され、抑制実施率が低下した」などがあった。これらは係長としての自身の倫理的行動が、部下の倫理的行動を促進したと複数の受講者が認識したことを示している。これらの結果から、本プログラムが係長の倫理的な行動力を高めるとともに部下の倫理的行動の促進をもたらすことに資する可能性が示唆された。また今後の教育プログラムや実践支援に向けて課題となる知見を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 柏崎 純子, 福宮 智子	4. 巻 14
2. 論文標題 専門看護師による倫理研修プログラムの評価：受講者の倫理的意識と行動の変化に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 28～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32275/jjne.20210527	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 八尋 道子	4. 巻 14
2. 論文標題 ケアの倫理：対話のプラットフォームから共鳴する看護実践の価値	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 57～58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32275/jjne.140102	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 前田樹海, 小西恵美子, 八尋道子, 福宮智子	4. 巻 11(1)
2. 論文標題 道徳的感受性質問紙日本語版2018（J-MSQ2018）：下位概念「道徳的責任感」を見直して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 100-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 福宮智子	4. 巻 2(2)
2. 論文標題 倫理カンファレンスの進め方	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 エンド・オブ・ライフケア	6. 最初と最後の頁 29-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福宮智子	4. 巻 23-1
2. 論文標題 併存疾患をもつがん患者のケーススタディ 精神疾患を抱えたがん患者	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 がん看護	6. 最初と最後の頁 34-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 福宮 智子, 佐々木 美代子, 舎利倉 幸香, 中村綾子
2. 発表標題 係長の倫理的行動を促進する看護倫理研修の実践とその成果
3. 学会等名 第26回 日本看護管理学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福宮智子
2. 発表標題 倫理的行動を促進する看護倫理教育の実際と評価の視点：臨床看護師の倫理的行動を促進する教育の実際と評価の視点
3. 学会等名 日本看護倫理学会第14 回年次大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福宮智子, 北原佳代子
2. 発表標題 発熱外来担当となった看護師のジレンマとその後の経過
3. 学会等名 日本看護倫理学会第14 回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木内小百合, 八尋道子, 市川慶子, 町田福水, 中島里美
2. 発表標題 看護のプロフェッショナリズムへ向けて: 臨床主導の倫理ワークショップで大学教員とコラボする
3. 学会等名 日本看護倫理学会第11回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yahiro, M.
2. 発表標題 The use of case study in nurturing nursing students as pivotal resource for provision of dignified care.
3. 学会等名 The 19th International Nursing Ethics Conference (INEC) & The 4th International Ethics in Care Conference (INECC) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福宮智子 井出由美 佐藤陽子 柏崎純子 前田樹海 八尋道子 小西恵美子
2. 発表標題 道徳的感受性に関する看護師への実態調査: 臨床看護師のための倫理教育に向けて
3. 学会等名 日本看護倫理学会第10回年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福宮智子 井出由美
2. 発表標題 倫理的行動力に関する看護師への実態調査; 臨床看護師のための倫理教育に向けて
3. 学会等名 日本看護倫理学会第10回年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 前田樹海 小西恵美子 八尋道子 福宮智子 井出由美
2. 発表標題 道徳的感受性質問紙日本語版J-MSQ2017の開発
3. 学会等名 日本看護倫理学会第10回年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柏崎純子 福宮智子 井出由美
2. 発表標題 新人看護師の入職時の道徳的感受性と倫理的行動力の実態
3. 学会等名 第21回日本看護管理学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井出由美 柏崎純子 福宮智子
2. 発表標題 新人看護師を対象とした倫理に関する研修プログラムの評価
3. 学会等名 第21回日本看護管理学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福宮智子 井出由美 柏崎純子
2. 発表標題 臨床看護職の倫理的行動力と道徳的感受性との関連
3. 学会等名 第21回日本看護管理学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井出由美 柏崎純子 福宮智子
2. 発表標題 新人看護師の道徳的感受性と倫理的行動力の変化および関連
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	八尋 道子 (Yahiro Michiko) (10326100)	佐久大学・看護学部・教授 (33606)	
研究分担者	前田 樹海 (Maeda Jukai) (80291574)	東京有明医療大学・看護学部・教授 (32821)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	柏崎 純子 (Kashiwazaki Junko) (10644594)		
研究協力者	井出 由美 (Ide Yumi) (80644591)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	佐藤 陽子 (Sato Yoko)		
研究協力者	小西 恵美子 (Konishi Emiko) (70011054)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関